

湧出ル小川アリ、同村ノ中ヲ流ル、コト凡六里バカリ、ニシ武甲ノ境ヘ至リ玉川ニ交ル、是ヲ小菅川ト云也。

玉川ノ水源ハ、武甲ノ境ノ峯西ヨリ東ヲ指、其峯ノ朶山ノ東ヨリ乾ヲ指テ小菅川ノ岸ニ及ブ、其朶山ノ正中、是亦武甲ノ境ニテ、甲斐ノ方ハ都留郡小菅村ノ地、武野方ハ多摩郡川野村ノ流也、其朶山ノ本ノ溪間ヨリ湧出ル水境ニ添テ、瀧ノ如ク流下リ、小菅川ト交、是則玉川ノ水源ニシテ、湧出ル所ヨリ玉川ト呼ビ、其左右ノ傍ノ山ハ、寛文九年ノ御繩ニテ宗玉川トアリ、亦同所甲斐ノ方ニモ小湧出テ、境ニ添テ流下、小菅川ト交ルコト武藏ノ方ニ等シ、甲斐ノ方ニテ是ヲ玉川ト呼、小菅川ハ玉川ト交ル所ニテ其名ヲ省キ、是ヨリ下玉川ト呼、西方ノ武甲ノ境、多摩郡ノ方ニ付テ、地ニ向ヒ流下ルコト一里許ニシテ川野村ニ至ル、西ノ方ヨリ丹波川流來リ、同村上ノ方ニテ玉川ト交ル、爰ニテ丹波川ノ名ヲ省キ、是ヨリ下モニ玉川ト呼ブ、此末玉川ニ入交ル小川多シ、

〔多磨河考〕多磨河は、安閑紀に多氷屯倉見えて、多氷は即多磨の通音なり。○中玉河と書は、建保の比より後、光る磨くなどいふ詞を詠合せし歌によれるにて、袖中抄にも其名に就て、兒玉郷におこりたらんよし注せし也、寛永以後僞作したりけんとおぼゆる總國風土記に、多磨、或玉、また多摩とも見えたれど、文祿以前の正き書に、多摩と書るはたえてなし、仁安年中の經筒の銘に多波郡、日蓮注畫贊に田波河、私案抄に多波河、神明鏡に丹波河などあるも、多麻とはいはざる證也、されば多磨河と書て、太婆我波と訓を正しとはいふ也、水源甲斐國都留郡船越村におこり、東隣の丹波山村を経て丹波川と號しさや川村鴨澤村をすぐ、以上の四箇村、往古は武藏國多摩郡内なるべければ也、さて多磨郡小河内、白尾、棚澤、丹波村を経、多磨郡中を流れ、荏原郡羽田の海につ、其間上道四十里許也、丹波村は大丹波小丹波と二に分れて、古の多氷屯倉は此處にや、又は丹